

第3章

兄になったhide



● 筆無精 からの手紙

手紙嫌いと思っていた hide から、真由子さんに手紙が届いたのは1月29日だった。封筒の裏に「hide」と差出人名が書いてあるのを見て、一家はわきたった。

「早く開けなよ」

仁美さんがしきりとせかすが、真由子さんの喜びはこのうえなかった。もどかしげに封を切ると、中にはいつぶう変わったデザインの便箋が3枚入っていた。

〈Dear 真由子〉で始まる1枚目には16行、2枚目には18行も文字が埋め込まれ、自ら「筆無精」というhideにしては、長文だった。3枚目は便箋の中央にhideのサインが大きく描かれている。

全文の公開はできないが、真由子さんは11行分を見せてくれた。

〈DAHLIA TOURが31日から再開なので最近JAPANに戻ってきたけれど… 寒いねえ 雪も降ったそうなの…〉

真由子さんと対面したhideは、年明けに2週間ほどロサンゼルスで過ごしていたのだ。

〈真由子の歩幅に合わせて歩いている内に、Noiseがどんどん聞こえなくなつて、昔の事とか初めてのドームの事とか忘れていた色々な「絵」が見えてきて、かなり感動したんだ。真由子のおかげで、思い出さなきゃいけなかったいくつかの事が頭にやきつきました。ありがとうな〉

手紙を送ってくれたこともさることながら、その後のふたりの交流を考えると、この文面は非常に重い意味を持っている。

hideは、真由子さんと手をつないでゆっくりドームの中を歩きながら、忘れかけていた「何か」を頭の中に蘇らせたにちがいない。そのきっかけが真由子さんであったからこそ、手紙で率直に「ありがとう」と書いたし、貴志さん一家が思いもよらなかつた真由子さんへの優しさを、次々と見せてくれることになるのだ。

一家は、それをすぐ思い知らされることになる。なんと、hideの母・順子さんからも手紙が届いたのである。

「オレ、ロサンゼルスに行つて日本を留守にすることが多いから、真由子が寂しがると思うんだ。代わりにお母さん、連絡をとってあげてよ」

これ以降、hideの松本家と真由子さんの貴志家とは家族ぐるみの付き合いとなる。大晦日の対面から1カ月もたたないうちに、hideの優しさが花開いた。

hideからの手紙は、真由子さんにとって正真正銘の宝だ。大切なものを収納する箱にしつかり収められている。

hideの支えを背に、真由子さんは東海大学病院へ入院するため、和子さんとともに神奈川県伊勢原市へ移動した。96年2月16日だ。この日、関東地方は雪が降った。

その雪の中を、ふたりのhideファンがワンルームマンションにやってきた。横浜市南区の縄重恵さんと、川崎市中原区の平嶋弥生さんだ。

ふたりとの出会いは、hideとの対面を果たした前年大晦日の東京ドームだった。ふたりを含む6人ほどのグループはhideコスプレで決めていた。それをめざとく見つけた真由子さんがグループに近づいて、写真を撮り合ったりしたのだ。

年明けになってすぐ文通が始まった。真由子さんが質問を出した。

「Xネームは、どうやって付けるんですか？」

Xネームというのは、X JAPANのファン同士が呼び合う、いわばペンネームのようなもので、難解な漢字が使われることが多い。

「だが、どう付けてもいいんだけど、真由ちゃんのXネームは私たちが考えてあげる」

縄重さんと平嶋さんは、ふたりしてあれやこれやと知恵を絞った。そのうち、2月に伊勢原にやつてくることはつきりした。

「会いに来てね」

グループのうち、伊勢原に近いふたりが訪問することを約束したのだった。

ところが、あいにくの雪だ。

「雪のせいにしたくないよね」

電話で相談し合ったふたりには、真由子さんに会いたいという気持ちのほうがまさっていた。

「電車が動く限り行こうよ。真由ちゃんも待っていてくれるんだから」

小田急の駅を降りたら、和子さんが迎えてくれた。さっそくマンションでXネームを披露した。

遊夜……真由子さん

青夜……政人さん

白夜……和子さん

迦夜……仁美さん

両親のXネームの由来は、94年のX JAPANの年末コンサートのタイトルが「青い夜、白い夜」だったからだ。真由子さんと仁美さんのそれは、読み方と字面から「これだ」と直感が働いたという。

マンションとはいえば、何しろ引越して来た日だから片づけも終わっておらず、お茶は机代わりの段ボール箱の上に載せられた。そのため、近くのファミリーレストランで夕食をごちそうになつてから、ふたりは帰っていった。

その後も、マンションや病院を訪れたり、手紙のやりとりがつづくのだが、OLの平嶋さんは年下の真由子さんに教えられることばかりだ。

「真由ちゃんに会つてからの私は確実に変わりました。彼女の『生きる力』というか、小さな体で『やれば、なんでもできる』という姿に、途中で投げ出しちゃいけないんだって気持ちになるんです。だから、嫌なことが重なった年があったとき、後ろを振り向くんじゃなくて、前向きに考

えて行動しなくっちゃって、頑張れました」

それがあるからか、hideが亡くなった日、ちょうどグループ旅行で大阪にいたが、旅行を台なしにしないためにも友人たちと別れるまで、hideのことを念頭から追いやっていた。その反動のように、5日に築地本願寺へ行ったら、大泣きしたまま立っていられなくなった。

「晴れた日にはhideの笑顔を見るようで、雨になると、それがすねた顔に変わる、そんな感じを今は持っています」

それはともかく、東海大病院への入院に当たっては、西脇中学の同級生らも側面から応援してくれた。真由子さんは日赤和歌山を退院した直後の1年生の秋には、一時的な不登校状態になったことがあるが、それを乗り越えてからは体育を除いてごく普通に授業を受けていた。

テレビ朝日系列が放映した朝の番組で授業風景が出てきた。数学の時間だったが、黒板に方程式の解答欄が空白になっていて、真由子さんが書き込むシーンがある。担任であり数学担当の広田好宏先生は、取材のために真由子さんを指名はしたけれど、解答は真由子さん自身が考えたものだ。

3年になって初めて担任した広田先生にとつて、真由子さんは手のかからない生徒だった。

「周りの友達が非常に協力してくれましたし、本人が頑張り屋なので、みんなに頼ろうとする気持ちがないで、自分でできることは自分からやろうとする意欲がすごかったですね」

真由子さんの学年の修学旅行は、例年の秋ではなく3年に進級してすぐの5月30日から6月1日までだった。行き先は東京や横浜、富士山麓などである。

広田先生らは母の和子さんが付き添うかと思ったが、和子さんには初めからそうした気持ちはなかった。クラスメートがよく面倒をみてくれることを、真由子さんに聞かされていたし、横浜には叔母（祖母・サダエさんの妹）一家が住んでいるため、何かあればそこに頼れると考えたからだ。「日程はきつかったと思いますが、あの子も頑張り屋さんですから」

広田先生は、盛んに「頑張り屋」と褒めそやす。

「文字を書くのに時間がかかりますが、ノートに写すことはちゃんとやりますし、そちらへの手助けはあまり必要ないんですね。移動のときには必ず行動をともにする友達が何人もいました。でも、荷物を持ってもらうことは真由子さんがいやがっていました。授業の取材であつたとき『大丈夫かな』と思ったのですが、取り越し苦労でしたね」

障害を持つ生徒を担任したのは広田先生にとつて初めての経験だったが、結局、手をわずらわされたという経験はしなかったという。

あのとこの同級生は、ほとんどが高校へ進学した。全国でも珍しい保育料のある和歌山県立貴志川高校へ進んだ大津綾さんは、今も真由子さんの自宅を訪れる。

「私もボランティアをやりたいから、手話を教えて」

そうした真由子さんの要望に応えるためでもある。高校のクラブ活動でJRC（青少年赤十字奉仕団）に入っている大津さんは、そこで手話や点字を覚えた。中学時代、真由子さんとは3年間一緒だった。

「真由ちゃんは病気を持っているし、体は丈夫じゃなかったけど、私たちは特別視しませんでした。普通の友達として、一緒に遊んだり、いろんな話をしたり、ホント普通の中学生生活でしたよ。ふだんは好きな男の子のこととか、hideのこととか話してましたが、私は真由ちゃんに聞くまでhideのことは知らなかったんです」

対面を終えての3学期早々はずいぶんうれしそうで、1週間くらいは明るい調子でそのときの話ばかりをしたという。テレビで、クラスの中の多くの友達が、真由子さんを囲む情景が出てくるが、それもいつもの姿だった。

「高校で言われたんです。『あれ、やらせじゃないの』って。でも、私たちのクラスは、お弁当も女子の半数ぐらいが固まって食べるような雰囲気でしたから、テレビはそのままを映したんです」

そうしたクラスメートたちは、東海大学病院への入院が間近となった2月初めに、真由子さんのために動き出したのだ。3年生と教職員全員が千羽鶴を折り、クラスメートは寄せ書きを書いた。

入院前の最後の学級活動で、真由子さんはこれらや花束を渡されて、和歌山をあとにしたのである。西脇中学の卒業式は3月11日だった。高校入試を終えての14日に、竹内正和校長と広田先生が東海大学病院にやってきた。談話室で真由子さんだけの卒業式がおこなわれ、竹内校長が卒業証書を読み上げて真由子さんに手渡した。

和子さんはもちろん、手の空いた看護婦が数人立ち会ったが、照れくさそうにしていた真由子さんの表情がうれしそうに変わったのは、テープに吹き込まれたクラスメートの「声のメッセージ」

を聞いてからだ。そこには、4日に迎えた15歳の誕生日を祝う『ハッピー・バースデー』の合唱と、ひとりずつの励ましの言葉があった。

「退院して元気になったら、みんなでもう一度集まろうね。真由子さんがそろって、初めて3年2組は解散になるんだから」

真由子さんと広田先生はそう約束しあったが、実現しないままに経過してきている。

●病棟中が大パニック

真由子さんの満15歳の誕生日だった3月4日、hideはロサンゼルスにいた。それが、13日に帰国する予定を1日早めて12日夜に成田に着き、13日に東海大学病院へやってきた。

「早く真由子に会いたいんだよ」

スタッフに、hideはそんな気持ちを伝えていた。

「真由子は病院から出られないだろうから、こちらから行くわ。元気出しいな」

そんなふうに言われたように受け取った和子さんは、hideの来訪を隠し通そうとしたが、真由子さんを担当している看護婦にだけは伝えておいた。

hideが病院にあらわれる少し前、男の子の患者が気落ちした表情で溜め息をしきりといっていた。その看護婦は気になって仕方がない。励ますつもりで、つい口に出してしまった。

「これからhideさんが病棟に来るんだよ。hideさんに会ってもらって、元気を出しなさいね」

男の子の目がパッと輝いたのはいいのだが、その子が母親に伝えた。

「じゃ、サインもらうために色紙を買ってこなくちゃ」
母親が売店に走る。

「X JAPANのhideが来る！」

アツという間に小児科病棟中に広まってしまった。子どもたちよりも、付き添いの母親らが興奮していた。病院も困惑したようだが、来てくれるとも言えない。

やがて姿を見せたhideを談話室に案内して、そこへ真由子さんと和子さんを請じ入れた。

「遅くなつたけど、これ誕生日プレゼント」
万華鏡まんげきょうを取り出した。

「ごめんな。ロスで何か買おうと思つたんだけど、時間がなくて。近くで買ったもんなんだ」

初めて手にする万華鏡の扱い方を、真由子さんに説明するときの情景は、ちょうど兄が妹に手ほどきしているように見えた。「お見舞い」という雰囲気ではなく、hideがスタッフに伝えたように「顔を見に来た」といった表現がびつたりしていた。

このときhideは、3時間近く病院にいたのだが、真由子さんとだけ会っていたわけではない。小児科病棟に入院していた子どもたちを励ましたのだ。無菌室に入っていた子ども5人を含めて、

10人以上の子どもたちが差し出す色紙にサインをし、一緒に写真に収まった。

その中のひとりが、福岡県宗像市むなかたの安井健吾君だ。

サッカーのレギュラー選手として、元気いっぱいだった小学校6年生の94年夏、高熱と貧血に見舞われて、九州大学医学部附属病院で急性骨髄性白血病と診断された。骨髄移植が必要だったが、親族の中にはHLAの適合者がいなかったため、骨髄バンクに登録したら2カ月後に早くもドナーが見つかった。

だが、この病院では骨髄バンクからの移植はやっていない。たまたま母・登代子さんの親戚が東海大学病院の加藤俊一助教授を知っていたことから、翌95年6月に東海大で移植を受けた。

96年2月23日に退院したが、その直前に真由子さんが入院してきたことから、母親同士の食事会を通じて知り合っていた。退院したその日、伊勢原市内に借りていたワンルームマンションに移つたのはいいが、健吾君が痙攣けいれんに襲われてわずか3時間で病院に戻ってしまった。

「そのときはびびくりしましたが、あとで考えれば、『3時間退院』だったから、hideさんに会えてサインをもらうことができたんですね」

●姉をドナーに移植

hideが真由子さんと再会した翌日、つまり3月14日に、ドナーとなる仁美さんが入院し、16

日に骨髓液が採取された。

血縁者間であろうと非血縁者間であろうと、骨髓液の採取とそれを患者に移し替える方法には区別が全くない。

骨髓移植の手順を簡単に説明すると、まず患者の骨髓液（正確には、そこに含まれる造血幹細胞）を抗ガン剤や放射線照射によって死滅させる。これを「前処置」と呼ぶが、数日から1週間程度を必要とする。

患者の造血幹細胞がなくなったあとに、ドナーから採取した骨髓液（正確には、健康な造血幹細胞）を点滴と同じ方法で、患者の腕から体内に注入する。ドナーからの骨髓液採取は、腰の骨に太い針を突き刺しておこなわれるため、その間ドナーは全身麻酔をかけられる。

したがって、手術室に入るのはドナーのほうであって、患者は無菌室で過ごすことになる。自らの造血幹細胞をゼロにするということは、体内に入ってくる細菌やウイルスを攻撃する白血球もなくなるわけだから、清浄度の高い部屋にいないとたちまち感染症に見舞われてしまう。

ただ、真由子さんの場合、骨髓液とCD34陽性細胞とを移植しなければならぬため、仁美さんはドナーふたり分の体験をすることになる。

仁美さんは14日に930ミリリットルの骨髓液を採取されたあと、28日と29日には陽性細胞を採取された。これは時間がかかる。

方法は成分献血と同じだ。経験者にはおわかりだろうが、末梢血幹細胞の採取には両腕に注射針

を刺し、片方の腕から機械を通した管を、もう一方の腕に戻す。必要なのは幹細胞だけだから、機械の中にこれを溜めて、残りの血液を体内に戻していくのである。

そのため、両日とも注射針を両腕に刺したまま、仁美さんは3時間もじっとしていなければならなかった。それだけではない。陽性細胞を採取する前には、造血幹細胞を体内で増やすためG・C・SFという薬を事前に9回も注射された。これは、仁美さんにとって身を切られるようにつらい。

なぜなら、仁美さんは何よりも注射が大嫌いだっただからだ。幼いころの逸話を、このとき両親は盛んに思い出していた。

風邪を引いた仁美さんを、近所の開業医へ連れていったときのことだ。和子さんに連れられた仁美さんが、中へ入っていく。政人さんは真由子さんと車の中で待っていた。と、仁美さんの叫び声が、医院の外に止めた車の中にまで響いてきた。

「これは、ものすごいことが起きているにちがいない」
慌てて政人さんが、診察室へ駆け込んでいった。

恐怖に顔を引きつらせた仁美さんの横で、医師が注射器を持ったまま笑みを浮かべて突っ立っている。

「まだ、打ってませんよ」

それほどに、注射針は見たくもなければ、ましてや突き刺されたくないものなのだ。本来ならやめてほしい。だが……。

「私、こんなのいやだ」

そうした言葉を、一切口にしなかった。事前に、和子さんが心配して尋ねた。

「大丈夫？」

仁美さんの答えは、あっさりしていた。

「いいよ」

そんな心境になったのを、今では不思議だと思う。「妹のために」と気負っていたわけではない。かすかにあったかもしれないが、ごく素直に注射を受け入れていた。

「減るもんじゃないし」

正確に言えば、一時的にだが「減る」。

骨髓液を採取されると、その分、体内から血液が失われることと同じなので、それに備えて前もって自分の血液（自己血）をとっておき、骨髓液の採取に合わせて輸血していく。しかも、造血幹細胞は1カ月もたたないうちに元どおりの数値に戻るのだ。

骨髓液と末梢血幹細胞の採取のため、それぞれ4日間、合わせて8日間の処置を受けた仁美さんだが、両親に不平を漏らすことはなかった。私の細胞を移植すれば、やがて真由子は元気になれる……。仁美さんの思いは、それに尽きていた。

（私も、hideと会ったからかな？）

仁美さんは、そんなことをベッドの上で思っていた。

真由子さん自身の造血幹細胞を死滅させる前処置は、18日に始まった。この処置は、ほかの患者と交わることがなく、4種類の抗ガン剤と胸部放射線照射で8日間おこなわれた。

無菌室へ入ったのは22日で、このときから両親といえども真由子さんとは直接の接触ができない。顔はガラス越しに見えるし、声もインターホンを使って聞こえるのだが、いわゆる「閉所」だから、無菌室にいるだけでストレスを溜める患者もいる。

真由子さんにはその心配がなさそうだった。消毒に耐えられるものなら中に持ち込めるからと、真由子さんはhide関連のグッズや写真を大量に持ち込んだ。それまでもらった千羽鶴も飾られたが、これはその後、多数が寄せられるようになり、順番に吊り下げることにした。

真由子さんの担当医は小児科の服部欽哉医師、看護婦は病棟主任の五十川美恵子さんと患者担当の松本佳子さんである。

無菌室入りと同時に、和子さんは看護婦とのあいだで『交換ノート』をつけはじめた。東海大学病院では、無菌室で治療するすべての患者についてこうした方針をとっている。特に家族が付き添えない夜間の様子を看護婦が記すことで、家族のケアも図っているのだ。

初日は、午後4時に真由子さんが入室したあと、看護婦が記した。

「今日は、テレビの取材が来たりで、慌ただしい日でしたね。真由ちゃんは、少し吐き気があるようでしたが、いつもの真由ちゃんのニコッが見られたし、hideのビデオも、私達に解説もしてくれて、まあまあ調子なのかなと思いました。明日から治療のお薬が点滴で入ります。まず、吐

きが出てくると思いますが、吐き気止めの薬を使いながら、本人が出来るだけ苦痛が少なく過ごせるように、配慮していきたいと思います」

23日には、和子さんと仁美さんが書いた。

〈今まで痛みのある検査には、色々と耐えてきましたが、吐き気が出るのはあまり経験がないので少しこたえている様でした。これからどうかよろしくお願いします。母〉

〈初めまして、真由子の姉の仁美です。昨日は今日よりも元気があり、笑ってくれましたが、今日はいぶ吐き気がするようで、真由子の笑顔が見ることができなかったのが残念でした。大好きなhideのビデオを見る元気もなかったようでした。真由子を見ている私たちも結構つまらかったです。これから、もつとしんどくなったりすると思うけど、がんばって欲しいです。私の骨髄液は1級品だぞ！ がんばれ！ 真由子をよろしくお願いします〉

前処置の副作用には、吐き気や発熱、脱毛などがあるが、経験者の話を聞くにつけ吐き気は我慢ならないものらしい。しかも、決まった時間に一定量の薬を飲まなければならず、これがまたいっそうつらさを高めるようだ。

この時期に、日赤和歌山の田中医師が東海大学病院へやってきた。

「東京で学会があるので、そのついでに……」

田中医師は遠慮がちにそう言ったが、実際には真由子さんが心配でしうがなく、会って励まするのが主な目的だった。その後も2回ばかり東海大学病院を訪れた。

待望の移植は、28日と29日の2回に分けておこなわれた。つまり、両日とも午前中に仁美さんから採取したCD34陽性細胞を、より純化したあと、午後真由子さんの腕から注射器で注入したのだ。

前に少し触れたように、骨髄移植とは正確には「造血幹細胞移植」のことだから、必要なのは分量ではなく、細胞数ということになる。真由子さんに注入した仁美さんの細胞数は、十分過ぎるほどだった。まさに「1級品」なのだ。

移植初日の『交換ノート』の和子さんの記述だ。

〈念願の移植も、明日もう一度入れる様ですが、*やっ*とここまで来た*が*という感じです。昨年頃、移植が出来るとは思えずに、ただバンクの返事を待つ日々でした。まだまだこれからが大変な日々が続くんでしょうが、頑張つてほしいと思います〉

●移植後すぐ危篤に

移植までは、すべて順調だった。移植後は、仁美さんからの造血幹細胞が真由子さんの体内で新たな造血幹細胞を造り出すかどうかにかかっている。これを「生着せいちゃく」という。

しかし、それを確認できるどころか、真由子さんは危機を迎えてしまった。

移植直後から、心臓の周りに水が少しづつ溜まり始めたのである。医学的には「心嚢液しんのうの貯留」

というが、放置しておけば心臓と心外膜のあいだに溜まる水によって、心臓が圧迫されて血液が送れなくなり、やがて命にかかわってくる。

3月31日の『交換ノート』に和子さんが書いた内容が、家族から見た真由子さんの状態をよくあらわしている。

「昨夜「淋しい」と云ってTELしてきました。今日も、「何時までいてくれる」「明日早く来て」と今まで云った事のない弱音をはいています。かなり体がだるいのだろうと思います。顔と足がむくんでいるように思うのですが。脱毛もかなりはげしい様で、色々な事が淋しさにつながっているのでしょうか。よろしくお願いします」

4月1日に心臓の周りから注射器で110ミリリットルの水を抜いた。貯留はそれでも止まらない。3日に160ミリリットル抜いたが、今度は肺にも水が溜まり始めた。継続的に抜く作業をづけたのだが、真由子さんは医師の目から見ても「虫の息状態」にまでなっていた。

3日の『交換ノート』に、和子さんはわずかしか書けなかった。

「今日の心臓のお水、赤いのが出たのでびっくりしました。のどの痛みもかなりひどい様ですね。とにかく1日でも早く落ちついてくれる事を願っています。淋しいと看護婦さん達にお世話をおかけていると思いますが、よろしくお願いします」

主治医の加藤助教授は、覚悟を決めた。

「ご家族の皆さまは、お集まりください」

和歌山の自宅では祖父の守さん、祖母のサダエさんが留守を守っている。それに、4月から高校3年生になる仁美さんが、3日夜に病院から帰宅したばかりだ。すぐに呼び戻した。

同時に加藤助教授は、両親が交代で無菌室の中に入ることを許可した。通常は、患者への感染を防ぐため医師や看護婦でさえ厳重な無菌操作をして入室する。例外として医師が家族の入室を認めるのは、もはや望みがほとんどないときに限られる。

加藤助教授は、真由子さんの「最期」が間近いと判断したのである。

和歌山から祖父母と仁美さんが、到着した。前日の真由子さんとは明らかに違った様子に、仁美さんは息を飲むばかりだった。

「なんとか、どうか、できないものか……。このままでは、頑張ってきた真由子がかわいそう……。せめて、hideさんの声だけでも聞かせてやれたら……」

3日の午前中は、心臓の周りに溜まった水が抜かれたせいも、真由子さんは比較的元気で、電話を通じてhideと話していた。

一夜明けた4日になってみれば、真由子さんはもう危ない状態になっていた。肺の周りにも胸水が溜まり始めたのだ。

せめて、もう一度、一方通行の電話でいいから、hideに声をかけてもらえないものだろうか……。考え出したら矢も盾もたまず、和子さんは事務所に電話をかけていた。マネジャーに真由子さんの危篤を伝えたら、しばらくして、無菌室の外にある電話が鳴った。

「hideです。オレ、これから行きますから」

あのう……反応している間もなく、電話は切れた。和子さんは、声だけ聞かせてくれればいいと思っていた。それだけでも、真由子は元氣を取り戻すはずだから……。

昼過ぎに、普段着姿のhideが無菌病棟にやってきた。ここへは普通なら家族か、よほど親しい間柄の人しか入れない。加藤助教が特別に許可を出したのだ。

無菌室の中にこそ入れなかったものの、ビニールのキャップをかぶり、特別製の無菌服に身を包んだhideは、ガラス越しに真由子さんをじっと見つめた。

hideが来たとき無菌室の中にいた仁美さんが、真由子さんに話しかけた。

「真由っぺ、hideさんが来てくれたよ」

それまで、いくら声をかけても、わずかにうなずくだけだった真由子さんが、うつすらと目を開けた。声を出すことはなかったが、真由子さんの顔がうれしそうな表情に変わったのを、仁美さんは見逃さなかった。

hideを含めて6人が、真由子さんに視線を送っている。

「まるで、家族全員が真由子さんを見守って、励ましているようだわ」

言葉にはしなかったが、無菌室の中にいた看護婦はそう感じた。

このとき、hideは間違いなく真由子さんの「兄」になった。

ぐったりしていた真由子さんが、腕を少し動かす。hideはすぐインターホンを手にした。

「早くよくなんだぞ。そうして、一緒に服を選びに行こう！ チーズケーキも食べに行こう！ だから、がんばらなぞぞ！」

真由子さんがうなずく。意識はもうろうとしているはずなのだが、視線をhideに移した。こぞとばかりに、hideはしゃべりつづける。

「今度出るCDのラベルに、真由子の名前を印刷するんだよ。だから、がんばれ！」

「9月に千葉でLEMONedのイベントを開くんぞ。元氣になって来いよ！ これは、真由子のためのお祭りなんだから、真由子が来ないと始まらないじゃんか。絶対に来るんだぞ！」

LEMONed（レモネード）とは、hideが所属する事務所の名前だ。9月のイベントはとりたてて真由子さんのために企画されたものではないが、とにかく「これからの楽しい出来事」をいくつも並べては、真由子さんを励ましつづけたのである。

この日の記憶は真由子さんにも薄いのだが、hideがやってきて盛んに声をかけてくれた事實は、しっかりと覚えているという。

取るものもとりあえず駆けつけたせいか、筆記具を持っていなかったhideは、『交換ノート』の丸1ページを使って、メッセージとサインを残していった。

Dear真由子 9月からhideのソロTourが始まります。真由子は約そく通り、赤毛のヅラで参加しなくてはなりません。がんばらなぞ……ね……。それと、hideのレモネードという洋品屋も5月にOPENするから……元氣になってお店に来て好きな服、選ばせてあげるから、

がんばらんだぞ……それからそれから、チーズケーキやな……チーズになるかと思う位、すっごいの喰おうな……」

見舞いの品物など用意する時間もなく病院を訪れたhideは、はめていた指輪をはずして、和子さんに託した。目玉をデザインしたもので、hideのお気に入りだった。和子さんはすぐ消毒してもらって無菌室に入れ、真由子さんの右手の親指にはめた。以来ずっとそのままにしている。

hideは4カ月後に、骨髄バンクにドナー登録をするのだが、記者会見でこのときの心境を問われて、次のように答えている。

「(真由子さんの)顔を見たかったし、(自分の)顔を見せたかったから」

● 奇跡が起きた!

hideの顔を見た日を境に、真由子さんの病状は急速に好転した。心臓が正常な鼓動をうち、もはや周りに水が溜まる兆候すら見せなくなった。白血球数が1マイクロリットル当たり1000(健康人は数千)を超えたのは移植から10日後だ。この数値は無菌室を出てもいい状態になったことを意味する。しかも、赤血球の輸血は移植から15日後、血小板の輸血は24日後にそれぞれ打ち切りとなった。

「特に白血球の増加ぶりは、通常の骨髄移植でもそうは見られない順調な回復です」

加藤助教授は目をみはった。

看護婦との『交換ノート』はしばらく絶えていたが、和子さんが再び書き込んだのは、やっと4月8日になってからだ。

4日の夜は、本当にびっくりしました。それから4日間、気の休まる時がなく過ごしました。看護婦さん方にも御迷惑をおかけしました。今日、先生からとりあえず一つの山をこえたかなというお話でした。まだまだ気を抜くわけにはいかない様ですが、ひとまずは安心しました。まだまだこれから大変だろうと思います。又、今回の事で、わがままになってしまった様ですが、どうかよろしく願います。

4月10日には仁美さんが和歌山へ帰っていった。真由子さんが準無菌室へ移る前日の16日には、さすがにホッとした様子がうかがえる。

〈明日、準無菌室に行けると、ニコニコしていました。熱も37度台で、ずいぶん楽になったようです。後は精神的落ち込みを回復するのが大変なようです〉

前年大晦日のhideとの対面から、ずっと真由子さんの闘病を追いつづけてきたTBSが、24日の放映のために最後の撮影にやってきた22日の記述だ。

〈今日は、テレビの最後で写しに来たり、ベッドのそばを少し歩いたり、つかれた様で、1時間ほどよくねました。久しぶりに歩く姿を見て本当にうれしかったです。とにかくがんばって、早く一人でトイレが出来るようになればいいのですが……〉

そして、24日に放映されたTBSの「スペースJ」では、「奇跡が起きた」と報じられた。しかし、加藤助教授はこの表現が、ちよっぴり不満だという。

「決して『奇跡』を否定するものではありませんが、私のほうからは一切『奇跡』という言葉は使いませんでした。ただ、『あなた方がこれを奇跡と呼びたいのなら、それは奇跡と呼べるかもしれないね』と言ったら、『奇跡』のところが使われてしまったんです」

自然科学者である医師としては、そうかもしれない。しかし、とりわけ小児患者の場合は何もかもが「奇跡」を起こしうるのではないか。そう考えざるを得ないくらい、劇的な回復だったのだ。「hideさんがすべての『奇跡』を起こしたのではないことは、何度か申し上げたのですが、やや違う方向で伝えられたわけですね。若い医師の必死の思い、それこそ昼夜を分かたぬ看護と治療を、24時間体制で様々にやりました。真由ちゃんは医療サイドの努力もさることながら、どんな状況でも我慢強く気力を持って闘病していましたし、このときもとても無理かなと私たちは思いましたけど、へこたれないんですよ。骨髄は本当に勢いよく増えていきました」

実際のところ、加藤助教授は小児科医の経験から、こうも振り返るのだ。

「奇跡うんぬんより、真由子さんの心の支えになってくれたアーティストがいて、個人としての彼が少女の支えになりたいというひたむきな思いを持って、そこに人間ドラマが生まれたという気がします。子どもが本来持っている生命力をなお力づけて、大人ではとても経験できないような、子どもたちにこそより多くある生命力の力強さ、素晴らしさというものが、われわれの常識を超えて

見られることがときどきあります。それが、真由子さんにもあったのだとあのとき感じましたね。それを支えたのが家族であり、若い医師や看護婦たちであつたのですから、関係者の努力の総結集だつたと思います」

X JAPANを知らなかった加藤助教授は、真由子さんが入院してくる少し前に予備知識を仕入れてはいたが、hideがいきなり病院に来ることには戸惑いを感じていた。しかも、どうやって情報を知るのが、大勢のファンと一緒にやってくるため、当初は「困ったな。せめて1日前に連絡してくれるとありがたいのだが」と、病院なりの都合を考えていた。そのうち、考え方が少し変わってきた。

「超多忙なスケジュールの合間を縫って駆けつけてくる努力には、頭が下がる思いにもなりました」
初めて言葉を交わしたのは、真由子さんが危篤状態になってhideが駆けつけた4日のことだった。

「あなたも多くのファンに支えられているし、それをしっかり受け止めてこういうことをやっておられるのは、私たちにとっても感激なのだから、その気持ちを忘れないでこれからも音楽活動をつづけてください」

医師としてではなく一個人としての言葉に、hideが静かに耳を傾けてくれたのを加藤助教授はよく覚えている。

音楽活動とは全く別に、ドナー登録までしてくれるとは、骨髄移植推進財団の医療委員長を務め

る加藤助教授にも予想外のことだった。

真由子さんは、4月から高校生になっていた。通信制の和歌山県立陵雲高校に入学していたのだ。この高校は平日はレポートを書き、毎日曜にスクーリングを受けながら単位を取っていくシステムだったが、危機を越えたとはいえむろんそれはかなわない。19日におこなわれた入学式には、政人さんが代理出席した。

窮屈な無菌病棟を出て、一般病棟に移ることができたのは、5月9日だった。和子さんの看護婦との『交換ノート』の記述は8日で終わる。

〈明日いよいよ退室です。長い間、本当にお世話になりました。まだまだ色々な事があると思いますが、頑張って行きたいと思います。本当にありがとうございます〉

看護スタッフ一同が、ノートの最後を埋めた。

〈退室おめでとうございます。本当に長く、険しい道のりでした。真由ちゃんの生命力とたくさんの人達の大きな支えがあつて、この苦難を乗り越えてくれたのだと思います。これからは、また今までより大きな視野で色々な事にチャレンジする、真由ちゃんの姿が目に見えます。大好きなhideのコンサートで、ジャンプしながら一緒に歌う日も遠くないですね。これからは免疫抑制剤が続きます。感染には十分注意して、特に肺炎にならぬよう、うがい、ネブライザー（吸入剤）は、さぼらずに頑張ってください。また、元気な顔を見に来ます。頑張ってください〉

しかし、真由子さんが無菌病棟に入っているあいだに、哀しい出来事があつた。それを加藤助教

授から知らされたのは、5月8日だった。

「平田さんが亡くなったんだよ」

CD34陽性細胞移植を、真由子さんが受けるきっかけになった平田浩三さんは、95年10月に同じ移植を受けたが、間もなく退院できるほど元気になっていた4月10日、EBウイルスによるリンパ腫によつて還らぬ人となつていったのだ。

「平田さんの分まで、頑張りたい」

哀しげな表情ながら、真由子さんはけなげにも加藤助教授にしっかり伝えた。

hideのアルバム『LEMONed』が発売されたのは5月22日だったが、SPECIALLY THANKSの対象者として、ジャケットに「MAYUKO KISHI」と表示された。危篤のときの約束のひとつを、hideはさっそく果たしてくれたのだ。

その後は危険な兆候もなく、体調が安定したまま小児科病棟で過ごしていた真由子さんは、9月に退院することになる。その前に和子さんは、患者家族支援滞在施設のためのボランティア活動に取り組んだ。

骨髄移植に限らないが、自宅から遠隔地にある病院へ長期入院する患者の家族にとつて、滞在施設の確保は不可欠であるにもかかわらず、日本では「お寒い状況」がつづいている。特に患者が小児の場合、母親が付き添うことが多いが、病院はたいがい完全看護であるため、面会時間を除いて病室にいられない。だから、和子さんも病院近くにワンルームマンションを借りざるを得なかった。

出費はかさむばかりだ。

そうした家族をなんとか援助しようと、全国各地のボランティア団体が滞在施設の管理・運営に乗り出している。

神奈川県内では、骨髄バンクのボランティアが中心となって「BMTハウスサポートの会」（松尾忠雄会長）を96年3月に設立したが、初めのうちは横浜市立大学病院に近い横浜市磯子区に施設を確保できただけだった。会で調査したところ、東海大病院での骨髄移植では家族の滞在が平均7カ月に及び、費用も200万円近くかかることがわかった。

そこで、BMTハウスサポートの会では伊勢原支部をつくり、伊勢原市内の行政、議会、ライオンズクラブ、ソロプチミスト、青年会議所の関係者に協力を求めることにし、そのために患者家族の率直な声を和子さんに語ってもらうことにしたのだ。

伊勢原支部長は、隣接の平塚市に住む川口真理子さんだが、川口さんは16歳になる長男が4歳のとき重症再生不良性貧血と診断され、骨髄バンクの設立運動からずっとボランティア活動をつづけてきていた。

川口さんに引率された和子さんは、6月と7月の2回、地元関係者の前で、二重生活が精神面でも経済面でもいかに大変であるかを詳しく説明した。生の声は確実に人々を動かした。

「うちでよければ」

そう言って、マンションの一室や一戸建て住宅を提供してくれる市民が、次々とあらわれたので

ある。和子さんが口火を切ったおかげで、伊勢原市内には6カ所7室の患者家族滞在施設が整った。光熱費などは実費負担だが、家賃は通常の3分の1以下に抑えられている。

管理や運営は、川口さんから伊勢原支部のスタッフが担当しており、家具や電気製品も完備されて、転居してきたその日からすぐ利用できるのが、大きな特徴だ。それに、施設だけでなく、精神面でのサポートにも乗り出している。会のボランティアの多くが、患者を家族に持った経験があるだけに、不安を取り除いたり励ましたりサポートにも力を入れているのである。

実際に和子さんは97年5月に、それまでのワンルームマンションを引き払い、ハウスサポートの会が管理・運営している3LDKの広いマンションに移転することになる。

日本ではもった、10都府県の12団体1個人（32施設62室）が運営しているが、すべて民間であるため「公的支援」への要望が高い。そこで、「ファミリーハウス」運営委員会（大平睦郎代表）が呼びかけ団体となって、97年から年に1回「全国ネットワーク会議」を開き、情報交換などに努めている。